語り手の想像力

—『運命』の一研究—

藤　原　洋　樹

岡山理科大学教養部

（昭和62年9月30日　受理）

序論

ジョセフ・コンラッド（Joseph Conrad）は，小説技法に大いに意を用い，「内容」に合った「形式」を求めようと，全精力を傾けて模索した真摯な作家であり，他の小説家や批評家からは，かなりの評価を受けていたにも拘らず，大衆の注目を引きつける事が出来ず，彼自身や妻や息子の病気なども重なって，ずっと経済的にも精神的にも，苦労をなめ続けていた。ところが，『運命』（*Chance*）の出版を境にして，彼は突然ベストセラー作家となり，経済的には多少潤うようになる。この小説は，1912年1月から6月にかけて，ニューヨーク・ヘラルド紙に連載され，1913年に単行本として，アメリカのダブルディ社から出版された。Lawrence Graver によれば、『運命』は、アメリカでは出版後五ケ月間で20,195冊，イギリスでは最初の二年間で13,200冊売れ，『ロード・ジム』（*Lord Jim*, 1900），『ノストローモ』（*Nostromo*, 1904），『密偵』（*The Secret Agent*, 1907），『西欧人の眼の下に』（*Under Western Eyes*, 1911）の初版本全てを合わせて，わずか10,000冊程度しか売れなかったのに較べると，大変な売れ行きであったが，同じダブルディ社から出版された，他の作家の或る小説が，同じ五ケ月間で300,000冊売れた[1]ということであるから，ベストセラー作家になったと言っても，たかが知れたものであった。

コンラッドは，自分の全集が出版されるのに際して，1920年に書き加えた，『運命』の「作家の覚え書」の中で，この小説がかなり売れた事に関して，「多くの人に，自分の信念の正しさが認められ，意を強くした。」という意味の事を述べており[2]，Gary Geddes も，That his readers understood his intentions seems quite obvious in light of the Author's Note,....[3]と述べているが，とても全面的には納得出来ない。「作品を読む」という事と「作品を理解する」という事が，同じことではないのは，言うまでもないからである。又当然，この小説の大衆受けが良かったという事が、即ちこの小説が彼の今

までの小説よりも出来が良いという事にもならない。

この小説には，『ロード・ジム』，「青春」（"Youth", 1898），「闇の奥」（"Heart of Darkness", 1898）に続いて，マーロウ（Marlow）という語り手が登場するが，この小説の中で最も気になるのが，この語り手マーロウの饒舌である。この小論では，このマーロウの饒舌の意味しているものを探ってみたい。

本論

『運命』に登場する語り手マーロウは，これまで三つの小説に登場し，作家コンラッドが，人間の深層心理を探った，彼自身の作品を創作する上で，重要な心理的機能を持たされてきた語り手であるが，この小説の中では異常な程饒舌である。彼の饒舌には，中心的なものに二つある。一つは彼の想像であり，もう一つは女性に対する皮肉である。

先ずマーロウの想像について考えてみよう。マーロウは，これまで彼が語り手として登場してきた，三つの小説中の人物設定とは異なり，物語の事件の直接の目撃者である場合がほとんどなく，間接的に他の登場人物，即ち第一部「乙女（The Damsel）」では主にファイン（Fyne）夫妻，第二部「騎士（The Knight）」では主に船員パウエル（Powell）から聞いた話を語っている。

一般的に，語り手と事件の間に他の登場人物が介在する時，事件にその登場人物の主観が入りこんで来るという面白さはあるが，ともかく語り手は，自分の目的にそって，他の登場人物の与えてくれた断片的な情報の中から，必要なものを選択し，欠落している部分があれば，自分自身の推理・想像を働かせて，一つの一貫したものに，まとめ上げてゆかなければならない。

マーロウに情報を与える，ファイン夫妻とパウエルが三人共，洞察力を持たない単純な人物であるという設定は，作者コンラッドの作為，即ち語り手マーロウに多大な想像力と推理力を持たせようという意図を，読者に強く感じさせる。原文91頁から124頁までは，フローラ（Flora）の家庭教師が，フローラの父親ド・バラル（de Barral）の破産を知り，甥と称する若いつばめと一緒に，フローラの家から逃げ出すまでの，行動と心理を描いたものであるが，これはマーロウが，ファイン夫妻から断片的な情報を得て，それを基に彼が想像力を働かせて，つじつまの合う様にした部分である。この部分の描写は，この小説の中で最もリアリティを持って，読者に迫ってくる所であり，コンラッドが，マーロウに想像力を持たせて，成功している箇所である。

> "She had seen her youth vanish, her freshness disappear, her hopes die, and now she felt her flaming middle-age slipping away from her. No wonder that with her admirably dressed, abundant hair, thickly sprinkled

with white threads and adding to her elegant aspect the piquant distinction of a powdered coiffure no wonder, — I say, that she clung desperately to her last infatuation for that graceless young scamp, even to the extent of hatching for him that amazing plot....”[4]

この引用は，マーロウがフローラの家庭教師の心理を想像して，述べている部分である。これまで我慢してやってきた，自分の人生が無駄に終ろうとしている事に対する，家庭教師の焦燥と絶望が，リズミカルな文章を用いて描かれているが，まさに表現しえて見事である。

マーロウに多大な想像力を持たせるという語り手としての機能における大きな変化の意味を考える時，『運命』を一時中断して書かれた小説『西欧人の眼の下に』に登場する語り手との相違に着目しなければならない。『西欧人の眼の下に』に登場する語り手は，初老の語学教師であり，彼はナタリー（Nathalie）に語学を教えていた関係で，主人公ラズモフ（Razumov）と知り合いになり，彼の手記をナタリーから託され，この小説の語り手を勤める事になる。彼は「ラズモフの手記と，ナタリーから得た情報だけを伝えているのであり，自分には小説家の才能はなく，事実だけを語っている」とひたすら述べているが，彼の語っているのは彼の知り得た事実だけではない。明らかに作者コンラッドが，語り手を飛び越えて，自ら語っている。[5]この語学教師の語り手は，なにかおどおどした自信のなさを露呈している。それに対して，この『運命』に登場する語り手マーロウは，ゆったりと落ち着き払い，自分の心の赴くままに，想像力を駆使し，横道にそれ，独断をものともせず，自信に満ちあふれた語り方をしている。これは，この二人の語り手の作者に対する親密度の違いもあるだろうが，それよりも，作者がこの二人に与えている機能の違いの結果だと思われる。そしてマーロウは，まさに小説家の才能を，ここぞとばかり遺憾なく発揮している。彼は自分に与えられた機能を，読者に暗示するかの様に，パウエルについて聞き手の「私」に次の様に語っている。

“You remember,” went on Marlow, “how I feared that Mr. Powell’s want of experience would stand in his way of appreciating the unusual....”[6]

“Yes, Mr. Powell, whom the chance of his name had thrown upon the floating stage of that tragi-comedy, would have been perfectly useless for my purpose if the unusual of an obvious kind had not aroused his attention from the first....”[7]

序論でも名前を出したGary Geddesは，コンラッドの後期の作品に対しても，高い評価を与えている批評家達の一人であるが，彼もこの点に関して，Marlow’s function in Chance parallels that of the novelist,...[8]と述べている。『西欧人の眼の下に』の語

学教師の語り手の設定の仕方に対する，コンラッドの反省が，マーロウに想像力を与えたことの最大の理由であると考えざるをえない。即ち，コンラッドは，語学教師には想像力を与えておらず，彼には事実だけを語る役割を押しつけているが，ラズモフが心ならずも友人のハルディン（Haldin）を裏切って，警察に売った後の，自分の良心に対する可責という苦しい心理状態を描写するには，ラズモフの手記だけでは，到底足りるに及ばず，しびれをきらした作者自身が，語らざるをえなくなってしまっている。語り手を設定しておきながら，作者が口を出すというのは，明らかに技法上の失敗である。この事に対する反省が，コンラッドに，次の作品『運命』のマーロウに有り余る想像力を与え，思うままに語らせるという反動になってあらわれたと思われる。

『ロード・ジム』と『西欧人の眼の下に』の二作品によって，『罪とその償い」というテーマを追求してきた，モラリストとしてのコンラッドに親しんできた読者にとって，全く意外な発言を，マーロウはこともなげに口にしている。

> "It's certaintly unwise to admit any sort of responsibility for our actions, . . ."[9]

> " . . . the incapacity to achieve anything distinctly good or evil is inherent in our earthly condition. Mediocrity is our mark . . . . "[10]

このマーロウの，ひいては作者コンラッドの倫理感の稀薄化は，多くの批評家の非難するところとなっていて，例えば Thomas Moser は，

> A view of the world which finds men not responsible for their actions will hardly reveal great complexity. [11]

と述べているが，この作品に Chance という題名をつけた事，又登場人物の運命が，彼らの内なるものに左右されるのではなく，外なるものに支配されるというテーマのあり方から考えれば，コンラッドがマーロウに，こういった発言をさせていても不思議ではない。更に，これまで述べてきた様に，コンラッドの意図が，語り手マーロウの想像力の解放という点にあるとすれば，この意図を達成するためには，「倫理感」という一つの枠も，作者には邪魔なものとなり，はずしてしまわなければならなかったと言えるのではないだろうか。作者が倫理感に固執すれば，当然語り手の想像力も限定されるのであるから。

ただ後半のアンソニー（Anthony）の心理には，リアリティが乏しく，少し無理がある様である。マーロウは「私」に次の様に断っている。

> " . . . I'll admit that for some time the old-maiden-lady-like occupation of putting two and two together failed to procure a coherent theory. I am speaking now as an investigator—a man of deductions. . . . " [12]

マーロウは，アンソニーとは一面識もなく，ファイン夫妻，パウエル，フローラの話から，彼の心理を推理しているわけである。マーロウは，アンソニーと，詩人であった彼の父親の類似性を，殊更強調し，それがアンソニーのフローラに対する愛情をゆがめていると述べている。

> "...The inarticulate son had set up a standard for himself with that need for embodying in his conduct the dreams, the passion, the impulses the poet puts into arrangements of verses,..."[13]

> "If Anthony's love had been as egoistic as love generally is, it would have been greater than the egoism of his vanity—or of his generosity, if you like—and all this could not have happened...."[14]

このマーロウの想像は，一見いかにももっともらしいが，なにかわざとらしく，こじつけた様な印象を与え，説得性に欠けている。コンラッドは幼くして両親とも失い，11才で孤児となり，叔父タデウス・ボブロフスキー（Thaddeus Bobrowski）のもとに身を寄せていたので，親の愛情というものを味わった経験は少ない。この実生活での寂しさが，彼に親子の絆というものに，観念的で偏執的な理想を抱かせ，この理想が彼の筆を狂わせたように思われる。

次に女性に対する皮肉について考えてみると，この饒舌は，『運命』の主人公がフローラという女性であり，この小説が結婚という題材を取り扱っている事と，多くの批評家達が述べている様な，コンラッドひいてはその分身とも言えるマーロウの女嫌いから生じている。即ち結婚という題材を取り扱えば，必然的に男性と女性の相違という事に触れざるをえないのであり，女嫌いのマーロウに語らせれば，当然女性の味方をする筈はない。第一部，第五章「The Tea-Party」では，フローラが失踪した（実はアンソニーと駈け落ちした）後，マーロウはファイン夫妻を自分の別荘に招待して，その事について話し合ったという事を，聞き手の「私」に語っているが，その時マーロウは次の様に述べている。

> "...The secrect scorn of women for the capacity to consider judiciously and to express profoundly a meditated conclusion is unbounded. They have no use for these lofty exercises which they look upon as a sort of purely masculine game—game meaning a respectable occupation devised to kill time in this man-arranged life which must be got through somehow. What women's acuteness really respects are the inept 'ideas' and the sheeplike impulses by which our actions and opinions are determined in matters of real importance. For if women are not rational they are indeed acute...."[15]

この引用は，女性の現実的な面を皮肉っているわけであるが，作者コンラッドが，一般大衆を女性に喩えて，彼らの嗜好—即ち本格的で真面目に書かれた作品よりは，気軽に読めて面白い作品の方を好む傾向—を皮肉っている様にもとれるので，留意する必要のある箇所である。又この作品が，作者の皮肉っている対象である大衆に受け入れられた事は，正に大いなる皮肉だと言える。ファイン夫人やフローラの家庭教師やフローラの事を語る時に，マーロウはこういった調子で，女性に対する皮肉な発言をしばしばしているが，これが読者が実際の登場人物を理解する上で何らかの助けとなりうるか，或いは物語に深い意味を与ええるか，という点を考えると，大いに疑問である。Douglas Hewitt の言葉を借りれば，

> It is often difficult to see the relevance of his comments either to the facts of the story he tells or to any deeper logic of mood.[16]

と言える。しかし，このマーロウの饒舌も，作者の意図を考えれば，いたしかたないものだと言える。何故なら，作者はマーロウの想像力を解放したが，マーロウ自身には，その想像力を抑制する力を持たされていないのである。コンラッドは，女性の読者を意識して，マーロウの話の聞き手として，「私」という人物を登場させて，マーロウの女性に対する皮肉を，読者に直接ぶつけない様な緩衝的役割を持たせているが，この「私」という存在は，全く正体不明で，わずらわしく，その存在の意義もうすい。第一部第六章「Flora」で，マーロウはファイン夫人から聞いたフローラの話を，「私」に語りながら次の様に述べている。

> "As is my habit, or my weakness, or my gift, I don't know which, I visualized the story for myself. I really can't help it...." [17]

アンソニーを除く登場人物の心理を，想像しえている点は gift であろうし，女性に対する皮肉は weakness の範ちょうに入れることが出来るであろう。ただ，このマーロウの言葉には，想像力を解放された彼のとまどった気持が表現されている。又同時に，この言葉の中には，作家コンラッドの，自分の小説の手法に対する自己評価のゆらぎがあらわれている様に思われる。マーロウが，自分の語っていることの情報源をしばしば断わっているのは，作者コンラッドが，マーロウという語り手に想像力を持たせるという試みに，徹底しきれなかった事を表わしている。

結論

コンラッドは，『運命』に付け加えた「作家の覚え書」の冒頭で次の様に述べている。

> "Chance" is one of my novels that shortly after having been begun were laid aside for a few months. Starting impetuously like sanguine

oarsman setting forth in the early morning I came very soon to a fork in the stream and found it necessary to pause and reflect seriously upon the direction I would take. Either presented to me equal fascinations, at least on the surface, and for that very reason my hesitation extended over many days. I floated in the calm water of pleasant speculation, between the diverging currents of conflicting impulses, with an agreeable but perfectly irrational conviction that neither of these currents would take me to destruction.[18)]

ここでコンラッドは，『運命』を書き始めてから，一つの迷いに捕われて，一時書くのをストップしたと言っているわけであるが，この迷いこそ，小説における語り手の問題についての迷いではなかったのではないだろうか。コンラッドは，『運命』の前作である『西欧人の眼の下』に登場させた語学教師の語り手には，事実だけを語る役割しか与えなかったので，想像の部分は作者が補足せざるをえなくなってしまっている。これは明らかに小説の手法上の失敗であり，コンラッドは，その反省として，『運命』の語り手マーロウには有り余る想像力を与え，思うままに語らせる事になったと思われる。そうする事によって，登場人物達の心理がリアルに描けたわけであるが，その副作用として，女性に対する皮肉な発言という饒舌を引き起こし，又倫理感の稀薄化をもたらす事になってしまった。

従って，『運命』という作品は，大衆受けが良かったとはいうものの，傑作とは言えない。しかしコンラッドの作家としての実験小説としては，『西欧人の眼の下に』に並ぶ依大なる失敗作と言える。

Notes

1) Lawrence Graver, *Conrad's Short Fiction,* University of California Press, 1971, p.170

2) Author's Note, *Chance*, pp. viii—ix の原文では次の様になっている。

...The general public responded largely, more largely perhaps than to any other book of mine, in the only way the general public can respond, that is by buying a certain number of copies. This gave me a considerable amount of pleasure because what I always feared most was drifting unconsciously into the position of a writer for a limited coterie ; a position which would have been odious to me as throwing a doubt on the soundness of my belief in the solidarity of all mankind in simple ideas and in sincere emotions. Regarded as a manifestation of criticism (for it would be outrageous to deny to the general public the possession of a critical mind) the reception was very satisfactory.

3) Gary Geddes, *Conrad's Later Novels,* McGill-Queen's University Press, 1980, p.29

4) Joseph Conrad, op. cit., p.104

5) 拙著 『西欧人の眼の下に』に於ける語り手の問題について，岡山理科大学紀要，第18号 B, 1983,

pp.21—29

6) Joseph Conrad, op. cit., p.272

7) Ibid., p.272

8) Gary Geddes, op. cit., p.22

9) Joseph Conrad, op. cit., p.23

10) Ibid., p.23

11) Thomas Moser, *Joseph Conrad Achievement and Decline,* Archon Books, 1966, p.155

12) Joseph Conrad, op. cit., p.326

13) Ibid., p.328

14) Ibid., p.331

15) Ibid., p.145

16) Douglas Hewitt, *Conrad A Reassessment,* Bowes & Bowes, p.99

17) Joseph Conrad, op. cit., p.177

18) Ibid., Author's Note, p.viii

On the Narrator's Imagination of *Chance*

Hiroki FUJIWARA
Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Okayama. 700, Japan
(Received September 30, 1987)

Marlow, narrator of *Chance,* is talkativeness itself. He talks of both what he heard from other sub-narrators and what he imagined about the psychology of principal characters. He is given great imaginative power by the author. In this brief survey I tried to show why Conrad gave great imaginative power to Marlow and what happened as a result.